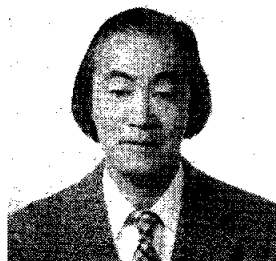




里山の自然を大切に

秋本 俊一



勤務の都合で山陰の小さな温泉町（鳥取県三朝町）で生活するようになって三年が経過した。戦中戦後の一時期を除いて東京を離れたことのない筆者にとって、この三年間の生活はすべてが新鮮で、環境問題、自然保護、農業

問題、地域の過疎化、高齢化、等々の諸問題についてのおのずから考えさせられることになった。

地球科学を専攻し、若い頃にはフィールド・ワークの経験もある筆者は、当地へ移ってすぐに家内といっしょに里山歩きをはじめた。丁度、四月半ばの林の中にはイカリ草やイチリン草、ニリン草が咲き乱れ、溪流沿いの小径にはユキワリ草が咲き残っていたりして、すっかり山野草の魅力にとりつかれてしまった。さらに五月下旬には、東京附近では見たこともなかった純白のササユリの花を見付けたりして、その上品な香りも清楚な姿の虜となってしまう。以来、四季折々の里山歩きを楽しんでいる。

こんなに楽しい里山歩きにも問題がないわけではない。山歩きには地形図が必需品であり、筆者も2万5千分の1の地形図で一本線の実線や破線で画かれている径を歩くことが多い。ところが、過疎地のこの辺では、大抵の場合、破線の径は途中で消えてしまつて、夏ともなれば草が生い茂り歩行不能なことが多い。地形図に堂々と中国自然歩道と記入されている道ですら、よく注意しないと踏み跡も見付からず、文字通りの「自然」である。実際、筆者は、勤務先の若い人から、「先生、里山で遭難して、テレビの全国版のニュースで物笑いの種にされないよう注意し

て下さい。」と言われている程である。

里山が歩かれなくなったのには勿論理由がある。まず、過疎地のこの辺では車は生活必需品であり、住民が歩かなくなつてしまった。国道や県道が立派に整備されたため、住民はほんの僅かの距離の移動にも車を使うことに慣れてしまひ、歩く道がだんだん荒れることになつてしまった。一昔前の山村の小学生なら、峠道二、三キロメートルの通学なら歩くのが常識であつたと思われるのに、今やバス通学である。実際、山間部の県道や町道に歩道が整備されていることはまず考えられないから、交通事故を考えればバス通学も無理からぬことと理解できる。

里山が歩かれなくなったのには、他にも色々な理由が考えられる。木炭や薪を使うことがなくなった現代の日本では里山の雑木が顧みられなくなつてしまったこと、林業の採算不振で松や杉の植林地の中に放置されている山もあること等はすぐに思い浮ぶ理由である。日本各地で猛威をふるっている松の立枯れもとをただせば山の手入れが十分になされなくなつてしまったからに違いない。

自然保護が声高に叫ばれるようになってからすでに久しい。自然保護の基本は、身近な自然に触れる機会をふやすことからはじまる。幸いに、筆者が現在任んでいる山陰地方は過疎であるが

ために、環境の保全は抜群であり、山野草だけでなく、トンボや蝶などの昆虫の種類も豊富であり、今の時季には蝨もとびかい、日本の自然の豊かさ、美しさを満喫することができる。それなのに、この辺の小学生・中学生も現代日本の受験中心の教育のためか、小川で小魚を捕ったり、野原でトンボを追いかけていたりしている姿があまり見られないのは少々気にかかることである。身近な自然の美しさ、複雑な仕組みを自分で発見することに楽しさを見出さないかぎり、環境問題の解決はあり得ないだろう。

秘境の自然保護も大切であるが、もっと身近な里山の自然を大切にすることの方がもっと重要であろう。大量のエネルギー消費につながる高速自動車道路の建設に要する費用の何百分の一かを全国の自然歩道の整備に使つてもらいたいものである。歩くことを忘れた人間に、ほんとうの自然はわからないと思う。

秋本俊一（あきもと しゅんいち）

一九二五年東京生れ。一九五〇年東京大学理学部地球物理学科卒。東京大学物性研究所で超高压地球科学を研究。一九八六年東京大学を定年退職。現在、岡山大学地球内部研究センター長、日本学士院会員。東京大学名誉教授